

参加者減 悩む「民意」

東京・永田町の首相官邸前で、毎週金曜夜に脱原発を訴える抗議行動が始まって間もなく1年。街頭での異議申し立ては政治参加の新しい形として注目されたが、参加者は減りつつある。「灯台のともしびのような存在に」。主催する市民団体や参加者たちは息の長い取り組みを目指している。



街頭へ

「再稼働は暴挙」「原発依存に未来はない」
15日午後6時、首相官邸前では太鼓のリズムに合わせた抗議行動が始まり、さまざまなメッセージが書か

れたプラカードが掲げられた。東京電力福島第一原発の爆発事故から2年。通算46回目だ。
昨年6月から参加するヘアメーキャップアーティストの武藤ちづるさん(55)は東京目黒区に仲間とフェイスブックで連絡し合い、必ず誰かが官邸前に来るようにしている。「何も言わなくなってしまう、何もし崩し的に原発が再稼働されてしまう」と考えるからだ。

昨年7月から月1回のペースで参加している森洋一郎さん(28)は東京都内では自営業。仕事を早めに切り上げて来たが、最近では若い人をあまり見かけなくなつたと思う。「放射能の怖さを実感しにくいせい、関心が薄れている感じがする」。多くの人と問題意識を共有しようと、抗議の様子をツイッターで発信している。

一方、警察関係者によると、ピーク時は昨年7月初めの約2万1千人。警察も参加者が減少傾向にあるとみており、「最近では数百人規模」とみている。

思を示そうと、昨年6月から3回ほど参加した。国内では50基の原発がすべて止まり、抗議行動の参加者が回を重ねることに増えている時期だった。「市民の力が政府を動かすかもしれない」。女性は期待したが、大飯原発は再稼働した。周囲との温度差も感じたという。フェイスブックで抗議行動のことを投稿しても、反応する友人はごくわずか。「ただ声を張り上げるだけでは意味がない。どうしたら理解を広げられるか考えている」

抗議行動を主催する首都圏原発連合(反原発)によると、昨年3月末にスタートした時は約300人だった。当時の民主党政権が関西電力大飯原発の再稼働に踏み切る直前の6月末には約20万人に膨らんだが、今年1万3千52500人で推移。15日は「約3千人」と発表した。

官邸前に来たことのない人たちに問題を知ってもらおう。反原発は2月、駅頭などでリーフレットを配る「NO NUKES MAGAZINEプロジェクト」を始めた。

第1号は「基本編」。原発事故が起きた福島の実状や稼働中の原発の数、原発のコストを分かりやすく解説した。第2号、第3号と配布を続け、仲間を増やしていきたいとしている。

「再稼働は暴挙」

第1号は「基本編」。原発事故が起きた福島の実状や稼働中の原発の数、原発のコストを分かりやすく解説した。第2号、第3号と配布を続け、仲間を増やしていきたいとしている。

でも、声を上げた経験が無意味だったとは思っていない。「今まで政治家は何をやっても国民が文句を言わないと思っていたかもしれないが、もう昔のように黙っていないと認識させることができた」(堀川勝也)



④福島第一原発事故から2年が経過した後の最初の金曜日、大勢の人がメッセージを手に脱原発を訴えた=15日午後6時19分、小川智撮影 ⑤原発再稼働に反対し、首相官邸前の道路を埋め尽くした人たち=昨年6月29日、仙波理撮影、いずれも東京・永田町

再稼働 落胆の声

なぜ、抗議行動への参加者は減っているのか。昨年7月を最後に官邸前に足を運んでいないNPO職員(44)は「神奈川県

相模原市は「限界を感じた。デモで何かが変わる状況ではなくなった」と打ち明けた。原発の再稼働に反対の意

でも、声を上げた経験が無意味だったとは思っていない。「今まで政治家は何をやっても国民が文句を言わないと思っていたかもしれないが、もう昔のように黙っていないと認識させることができた」(堀川勝也)

デジタル版に動画